



第 581 号

しらさぎ

令和 8 年 9 月 30 日
横浜市立公田小学校

友だちとの「正の仲間意識」

校長 中川 浩二

9月3日の全校集会で、「いじめの未然防止」について6年生2名の児童が発表しました。年に一度、全校の子どもたちが、「いじめ」を自分事として考える大切な機会となっています。

集会後も、「あの時のいじめについての集会の話を覚えていますか」、「その時の話をふり返ってみると・・・」というように、子どもたちに折に触れて語りかけるようにしています。

さて、学校でのいじめについて、文化人類学者の上田紀行氏は、著書の中で、次のように述べています。

「ひととは孤独では生きていけないから、仲間が欲しいし、集団の中で生きたいと望んでいる。『いじめ』『悪口』によって、仲間や集団を得ようとする」

「学校でのいじめは、社会の『仲間意識』『協同性』のあり方が、純粹に現れている場とも言える」

この指摘は、なぜ、いじめが起こるのかを考えるうえで示唆に富むものです。そして、わたしたち大人にとっても、自分の心の中に潜む心理として「はっ」とさせられるものではないでしょうか。

学校生活の中で、子どもたちは時に「悪口」「からかう」「仲間外れ」といった「負の仲間意識」でつながろうとしてしまうことがあります。

わたしたち教職員は、この「負の仲間意識」を「正の仲間意識」へ変えていくために、日々真剣に取り組んでいます。

授業の中や当番活動、なかよし班活動の中で、認め合い協力し合う体験を積み重ねていくこと、「本当の友だちとの関係とは何か」を子どもと丁寧に対話すること、「教師は最大の教育環境である」という言葉を胸に、教員の言動や子どもに対するかかわりを大切にすることなどです。

教職員全員で、子どもたちをあたたく支援してまいります。

ご家庭におかれましても、お子さまと「友だちとの正の仲間意識」についてお話をしていただけますと幸いです。

(出典：上田紀行著『覚醒のネットワーク』アノニマ・スタジオ、2022年)